

あんのんえんこう

宰相山 角屋

圓光寺だより

新年の抱負（親鸞聖人から学ぶ）

私たちが親鸞聖人に惹かれるのはどんなところでしょうか？それは時代は違っても、私たちと同じように悩み、苦しみ、思いどうりにならないということに向き合い続けたことだと思います。

堂僧として比叡山で修行して悟り得たということができるところを、自分に嘘をつけないそういう人だったのでしよう。表向きは仏弟子としての振る舞いをしながら、権力争い、夜な夜な山を下りて遊ぶ比叡山の僧侶。自分もそういう欲はどうしても捨てきれない。それで20年間修業した山を下りた。

そして六角堂で九十五日目に救世観音菩薩のお告げを受けた。「修行者がもし女犯、つまり妻帯するのであれば、私が玉女になって妻となるう。そして一生の間、伴侶となり臨終の際には極楽に導こう。」

いち男子の親鸞、山でまじめに禁欲の生活でも頭の中はぬぐい切れない妄想が走る。それ

〒五四三・〇〇一三 大阪府大阪市天王寺区玉造本町一三・五
電話番号、FAX 〇六・六七六一・八二九三

がお告げとして下りたのではないか。その時代、おおっぴらに僧侶が妻帯することはありえないこと。親鸞は自分の感情に正直に恵信尼と結婚した。

親鸞が晩年まで訂正しながら「教行信証」を書き続けた。死ぬまで自分は悟りをひらいたとは思ってなかったのではないか。仏教を問いつけた人生だったと思う。

遊女、河原者、分け隔てなく人と接し、悪を犯さないと生きていけない人たちと話をすることも修行でありその人は自分にとって仏である。親鸞を慕って人々が集まってくるのも親鸞の本当の自分を隠さないところではないかと思う。それが今の人にも親鸞の魅力ではないか。

ふりかえって私たちの行動を見ると、本当の自分以上に見せようとしがち。変なプライド。大きく見せようとすればするほど、本当の自分が知っている自分と乖離が大きくなる。仮面をかぶった人生で、自分でも何がしたのか、本当の自分がわからなくなる。

令和 六年 一月号
寺報 あんのんえんこう
発行 圓光寺ごほう志会
執筆 足利誠正、正往 和枝

No. 100

現代社会の中に放り込まれ、子供のころのどこかで何か不安を感じる、いやおうなく感じさせられた経験があり、その自分を改善するように強くなるように教えられてきた。不安でもいいとは教えられてこなかった。正信偈にある「不断煩惱得涅槃」煩惱を断たずして涅槃を得る。ありのままを受け入れていく。

弱み（本当の自分）を見せるのは勇気がいることだし、嫌われるかもしれない。不安を隠して作られた自分を演じているひとが多いなかで弱みを見せれる人は、本当の強い人であり周りに安心感を与えるひと。人の心を開かせる人、親鸞聖人みたいな人ではないか。

みんな凸凹。できる、できないことがある。それを補い合う人間関係がこれからの社会。「自分はこれができない」じゃあ得意なあの人がやる。自分はこれが得意だからやってもらったあの人の分をやる。助け合いの集団、仏教のサンガ（和合衆）。自分一人で全部できる必要なんかなかったんだと気づく。

そのためには自分の知らない、自分の小さな価値観で近づかなかった世界に積極的に見

行く行動することである。そして自分の弱みを受け入れ、そのままの偽りのない自分を見せること。それを新年の目標にしようと思う。

(正往)

メジロ



南天



彼岸会法要のご案内

来年の春の彼岸入りの日(三月一七日)に永代経法要を勤めます。その時には皆様各家の永代供養を執り行いたく思います。お勤めの後の法要は前回に続き西念寺住職 中神章生氏にお話しいただきます。圓光寺所蔵 掛け軸の展示、説明をしていただきます。どうぞ多数のご参詣をお待ちしております。

・別途、返信封筒に参加、不参加、○をつけてお送りください

日時 3月17日(日曜日)

時間 午前10時から12時まで

法要 おつとめ 永代経法要

掛け軸 説明

法話 滋賀県西念寺住職 中神章生氏

「親鸞と現代人の闇と光」

親鸞聖人も私たちも同じ人間として、苦悩を抱えて生きています。そのような人間の闇を、親鸞は光によって破り、九十年の生涯を生き抜かれました。私たちは、なにを光として生き抜いていけるのでしょうか。生きるのに疲れているひとも多いことでしょうか。そこに「光」を見出していくヒントをとともに親鸞聖人に聞いていきましょう。(中神章生)

千両



万両



この世に生を受けることは「いかに生き、いかに死を迎えるか」の長い旅路の始まりです。寺はともに歩んでいく「心の場」としての役割があるように思います。

お釈迦様が入滅のときに、弟子たちに対して法を灯明として師とせよ」と戒めました。「これは「法」をよりどころとして、「自分」を頼りとして生きなさいということ。当院でも年に「数回「法」である仏教を学ぶ場を計画したいと考えています(坊守)

一月揭示板

南無阿弥陀仏をとなふれば

四天王もろともに

よるひるつねに まもりつつ

よろづの悪魔を ちかづけず

念仏道中のよろこびをうたったものです。よるひるつねにまもられている衆生の信じてうやまう感情があらわれています。

影の形にしたがうように、護りたまうことをあらわす和讃です。